

武蔵野幕屋創立38周年聖書講筵 祈祷会

我は火を地に投ぜんために来れり

――ルカ伝第12章49～50節――

1978年9月24日

小池辰雄

パリサイ根性 神的権威 靈火の人 靈火体 靈火を受ける大前提 不可離の十字架と聖霊

●パリサイ根性

ルカ伝第11章53節、

「⁵³此^こ処^こより出で給えば、学者・パリサイ人ら烈しく詰め寄せて様々のことを詰^なりはじめ、⁵⁴その口より何事をか捉^とえんと待構^{まち}えたり」(ルカ11・53～54)

あしざまに考えて、何とかしてキリストを陥^{おとし}れようとしている。そのとき群衆がひしめき合っていたが、イエスはまず弟子たちに言い給うた。

「なんじら、パリサイ人のパンだねに心せよ。これ偽善なり」(ルカ12・1)

パリサイのパンだねは腐らせる酵母のようなもので、要するに、パリサイ根性というのは宗教界の一つの癌^{がん}みたいなものです。

「パリサイ」というのは「分離者」の意味で、自分たちは他の者から「分かれたる者」と自任し、モーセの五書に忠実な宗教的、道徳的、特権階級だと思っている連中で、とかく他を審くわけです。宗派根性というのは大同小異で、大体このパリサイ根性に毒されているようなものです。自分の信仰箇条、礼拝様式、制度的な宗団のあり方等で他を批判して、おのれを義^{ただ}しとする根性です。

政治の世界でも、イデオロギーによって、他のイデオロギーを悪し様に言つて、自分のイデオロギーの方に人を入れようとする。政治の世界でも、宗教の世界でも、その他諸々の文化現象において、共通に多かれ少なかれ、このパリサイ根性というのはあるわけです。それからまた、人間が本来持っている自己主張、自己弁護、これがみんなパリサイに通ずるわけです。自分を善しとして、他を悪しとする。ケチをつける。とにかく、人間のいるところには、パリサイ根性というのはつきもののようです。キリストが一番敵にしたのがこのパリサイなんです。

「取税人、遊女は天国に近い」

と。しかし己を義とするとところの自己義認の、自己主張のパリサイは、実は天国に遠いんです。だから、キリストは自分を善しとなさらなかった。



「神の外に善きものなし」

と。それでキリストを私は「無者」と申し上げざるを得ないわけなんです。キリストの言葉に、

「己を低うする」

という言葉がありますけれども、低さもどんだ底の低さなんです。またキリストは、

「砕けの人」

であられました。「謙遜」という言がありますが、もう一つ奥の世界。神様を100%に立てる世界は、自分が砕けであり、ひれ伏しである。平伏し、砕けの魂は、詩篇51篇にある通り。自分をキリストの砕けの十字架の下に投げ入れる魂です。

キリストは手放しで「砕け」でありましたけれども、我々は手放しで「砕け」になれない。だから、我々「罪びと」というのは、パリサイ根性がどっかにあるということです。我が内にあるパリサイと、先ず戦わなければならないわけです。

神様やキリストを相手としたら、自分の側には立場も、足場も何にもない。無立場です。自分を何ものかと思ひ、人を批判するパリサイ根性は人間の心の中の癌です。身体の中の癌に対する心の癌なのです。これが自己主張のパリサイ根性で、これが我執という罪の根です。

「罪」とは神様を立てない、キリストを立てないで、自己を立てること。どんなにそれが善きものであっても、自己を立てる限りはだめなんです。これは普通の道德の世界ではわからない。道德的に結構なことは、相対的現実では結構なことです。主義主張もそれぞれなければならぬ。相対的な現実ではそういうことも言えます。

ところがそういった主義的判断からもう一つ上につき抜けないと、その主義も正しくは生きないのです。それぞれのイデオロギーはそれぞれの良さを持っている。良さを持っているけれども、これを限界を越えて主張したらパリサイになる。イデオロギーはある限界を持ったところのものですから。これを良く使うためには、もう一つ高い次元からこれを捉まえていなければだめで、その中に自分が居たらだめなんです。

突き抜けた高い処か、突き抜けたどん底か。一番高い処と、一番低い処はこれまた一つなんです。

「至高者は心の砕けたる者の中に住む」

とイザヤ書57章15節にある通りです。天の星は深淵に影を宿すのです。相対的判断を絶したところから見えていくと、今度は相対的判断のいろいろなことをオリエティーレンする。即ち位置付けをすることが出来る。その限界をちゃんと究めていくことができる。要するに色眼鏡でなく、天然自然の眼で見るわけです。太湯の白光だから見えるんです、良さも限界も。そういうことになったら、もうパリサイ根性から抜けている。パリサイ根性から抜けるためには、絶対的なものの中へ入らなければだめ。要するに、相対的現実から、絶対境を裏に有つということです。



「キリストの中に」「エン・クリスト」の現実が信仰の奥義です！そしてキリストの光を浴びる。烈々たる太陽の如きキリストの中に入ると、聖霊という火の如き霊に触れる。聖霊のバプテスマにあずかる。そして、自分自身が霊火的な体になってしまう。だから、

「パリサイ人のパンだねに心せよ」

とキリストは言われるけれども、同じ次元で心したってだめですよ。それはもうひとつ大きな、高処から見れば、キリストが言われる「心せよ」が楽に受けとれることになるのです。自己義認がパリサイ的偽善の源なんです。何か偽りの悪い事をしているということではない。パウロが、

「^{おきて}律法の義につきては責むべきところなし」

と言っている。その立派さが偽善なんです。パウロはキリストにぶつかってそれがわかったのでこれを塵芥ちりあくたの如く棄てました。

● 神的権威

第12章の5節に、

「^{おそ}5 懼るべきものを汝らに示さん、殺したる後ゲヘナ

永遠の罰を与えるところの地獄のことです。

に投げ入るる権威ある者（即ち神様）を畏れよ。

と。神様の権威、神威、神権。キリストは自分を無者にしたらば、本当の神権者になった。神の権威を持つ人になった。だから、人々は、学者の如くならず権威ある者らしく語るキリストにびつくりした。ほじくりまわしているようないわゆる学者なんていうものは大したことはない。学問の権威というものをここにけなしているではありませんが、いわゆる分別の世界を超越した世界に入らなければ、たましいの本当の世界はわかりません。

われ汝らに告ぐ。げに之を畏れよおそ（使徒行伝12・5）

神様を畏れよ。キリストは本当に神を畏れた。畏神いしんとは神様を恐ることじゃないですよ。神の前に本当に平伏して自分を何者ともしないということが畏神ということ。そうすると神厳なるものがこちらに入ってくる。

● 霊火の人

死んでも死なない、肉体は焼かれても焼かれないもの、これが今日私たちが祈祷会で言うところの火「^ひ霊」なんです。

「心頭を滅却すれば火もまた涼し」

と言うが、

「心中に霊火あれば火も尚涼し」



でありましょう。霊火は赤い火より凄い火です。霊火はまぶしくて目がくらんでしまう。赤い火ではなくて黄金色に輝く火。

そこでパリサイ根性から抜けるためには、キリストの十字架で魂が碎かれることが先決です。そしてみ霊による黄金の火を受けとることです。

「我は火を地に投ぜんために来れり」(ルカ12・49)

この霊火を受けとる人々は、

「ああ、われ悩める者なるかな」

と言ってキリストに依りすがる者、悲しむ者、泣く者、求める者、みんなこの火を受けることのできるたましいです。

「幸なる哉、キリストの霊火を受ける者」

と申したい。キリストは、

「わたしは神様から火をもらっているのだ、これを受けよ」

と言っておられる。そういう霊火の人です。

「私はこの火を投じようとやって来た」

大切なのは正にこの一句なんです。

●霊火体

「火を投ぜんために」

と、霊火を投じようと思つて来られた。いや、実にキリストの在るところに霊火が燃えていた。現在でも本当にそうです。だから、この霊火の中に投身、霊火の中に自分を投身させて、私たち自身が霊火現象を起こさなければだめです。私たち自身が霊火体にならなければ。

「我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何を

か望まん」(ルカ12・49)

「おまえたちの中にこの霊火が燃えたら、もう私はいいんだよ」

と。そうなったら我らはもう運命、環境がどうなろうと、必ずこの霊火で勝つていける。

「環境をどうする、運命をどうする」

とか、そういうことは第二義的なことで、第一義的なことは自分自身が霊火体となることです。問題はただ一つ。そうしたら周りが、

「何だか知らんけど、こりや大変な奴だな。もう相手ではない。参りました!」

と。こちらは無手勝流、無刃流です。まあひとつ、真剣に祈りの人になって下さいよ。祈らなければ絶対にダメ。パウロも、

「つねに祈れ!」

とローマ書第12章で言っています。マルティン・ルターはコーブルクの城で毎日3時間祈



つていたという。

キリストは聖霊のことを「火」とここでは言っている。

「私が与える霊火が燃えたら、万事善し」

というのがこの気合。ある時は、

「私の与える水を飲んだら永遠に渴かないぞ」

とヨハネ4・14でイエスは言いました。不尽の泉が湧き出でる。活泉である。こちらはまた、炎々として燃えて尽きない太陽に聖霊を譬えておられる。太陽を冥想するだけで凄い事になる。キリストを冥想しながら、キリストの霊火漬けになってごらん下さい。そうしたらえらいことになります。キリストと偕に海の上をも渉わたってしまうかも知れないぞ。

● 霊火を受ける大前提

「されど我には受くべきバプテスマ（十字架）あり。その（十字架の贖罪死の）

成し遂げらるるまでは思おもい逼せまること如何いか許ゆるぞや」（ルカ12・50）

「霊火を投じようと思うが、今は投じられない。私は断腸の想いである。この火が燃えるためには、わたしは十字架というバプテスマを受けなければならない。お前たちのその自我、我執、パリサイ根性を根こそぎにしてやらねばならない。全部わたしが引き受けた！」

こんなお気持がキリストの腹の中におありだったのでしよう。贖罪の十字架こそ霊火を投ずる大前提であつたことを夢忘れてはなりません。

我々は何時まで経つても同じような簡単なものではない。パウロですら、それでどうかなるような簡単なものではない。パウロですら、

「噫ああ、われ悩める人々るかな、この死からの体だ」

と言つたでしょ。救を要しない人は一人もありません。立派もへつたくれもないんですよ、本当は。それを相対的に、

「あの人は立派だ。この人は潔きよい」

なんて、品さだめのようなことを言う。まだそういう相対的な評価などしているのはおめでたいはなしです。偉大なる宗教家たちの苦悩は、そんな判断の奥の世界での苦悩でした。そこでたましいの苦闘をした。相対的評価を絶したところに往くと、第一流の宗教家たちの心境がわかる。アモス、ホセア、イザヤ、エレミヤ、エゼキエル、等々の預言者やペテロ、ヨハネ、ヤコブ、パウロ等の使徒たちはそういうたましいの戦をやったのです。

● 不可離の十字架と聖霊

キリストが火を投じようとして、まず受くべきバプテスマ、十字架を思われたこと。その49節と50節。これは忘れることのできない2節です。この二つにおいて本当にキリスト



の本願の呻きと叫びを受けとればえらいことになる。ルカ福音書12章49節、50節！ この50節が十字架の贖いであり、この49節は聖霊のバプテスマです。

「この十字架の贖罪死を遂げたら、お前たちに霊火を投ずる」と。これがペンテコステの聖霊なんです。

「今、私は十字架の贖罪死を遂げたら、復活、昇天して、聖霊を降^{くだ}すことができる」

と。これが救の確かさの二焦点です。即ち十字架と聖霊。イエスがここで叫ばれた十字架のバプテスマと聖霊の火です。

我々はキリストの十字架で贖われました。何ももう問題はありません。ですから、霊界から投ぜられるキリストの霊火、聖霊を、祈りを以て無条件に拝受します。この十字架と聖霊に我らの救いの確かさの根拠があります。キリストの栄光と永遠の生命、キリストの義と愛が我々を圧倒するように臨んで来ました。アーメン、ハレルヤです。新春を迎えて、この霊火、霊光を新たに賜り、聖霊の霊火体とされて邁進^{まいしん}します。

「されど我には受くべきバプテスマあり」

はこの私たち、どうにもならない者のために、十字架で全部贖罪して下さった。もうたまたまです、キリストの十字架は。だからもう無条件に、有るがまま、このままキリストの中に自分を投げ入れます。白熱的祈入、電光石火、霊火体とされる。絶対次元、身辺にありです。キリストの霊光霊火を浴びて、

「狂えるならば神のためなり」

とパウロと共に叫ぼう。

この2節に圧倒され、

「キリストわがうちに、われキリストの中に」

「エン・クリストー」

の現実を日一日と進み往かん！ もう何が起きても本当の勝利で相手を担い、相手を包んでしまつて、本当の歓喜の世界を展開しつつ進みます。ハレルヤ。

〔附記〕 本稿は1978年9月24日、武蔵野幕屋38周年記念祭の夜の祈祷会で語ったものに基く。

（「活かすキリスト」155号 1979年1月号より転載）

